

トロイメライのあとで

鉋手

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学生の頃のよしみでルームシェアをしている有理奈（ゆりな）と青空（せいら）。どことなく距離のある生活を送る中、青空の声が出なくなっただことで二人の関係に変化が生じていく。

目次

情報番組のアナウンサーが機械的に読み上げる。元からそうだったのか、それとも私の心持ちが変わったせいなのかは分からないが久しく良いニュースというものを聞いていない気がする。こちらとしては今日の天気だけが気かりなのだが、どうにもこういう話題には耳ぎとくなってしまう。

「今日は一時限目と二時限目に講義があるだけだから、たぶん昼過ぎには帰ってこられると思う。そっちの帰りは夕方頃だったっけ？」

青空は出汁巻き卵を口に運びながらこくりと小さく頭を傾けた。初めての新学期といつてもそう大して去年までとさして変わらないものだ。コルクボードに吊るしたカレンダーに目を向ける。時の流れというものは早いもので、何が起ころうと素知らぬ顔で時雨のように過ぎていく。このカレンダーを買ったのもついこの間のことだと思っていたのにあつという間に一年の三分の一近くが過ぎていた。

「じゃあ夕飯は私が作っておくよ」

たしか賞費期限の近い豚肉と玉ねぎがあつたはずだから今日は肉じゃがでも作ることにしよう。それともうそろそろ醤油が無くなるはずなので、大学から帰るついでにでも買いに行かなければ。自分以外に作った料理を食べてくれる人がいるというだけで献立を考えるのも楽しくなる。

『そもそも人間の精神というものは可視的に存在するものではないのですから、そこにメスを入れて病気だとか病気でないとか診断すること自体がおかしな話なんですよ。やれ鬱病だのPTSDだの、彼らはいったい何を証拠に病気だと診断しているというのですか。あのよなものとはただ本人がそう言っているというだけで適当に当てはめているのだから…』

『そうは言いますがね、フロイトが示したように心の病というのは確かに存在するんです。あなたは精神医学そのものを否定するつもりですか？我が国のみならず、この世界にいったいどれだけの数の方々が今も精神疾患に苦しんでいらっしゃると…』

テレビのスイッチを切るとあれだけうるさかったコメンテーターの人達が一斉に静かになった。朝から嫌なものを見てしまった。視

降りた乗客は私を除けば誰も見ていなかったはずだった。

「こんな所で会うなんて奇遇だね、なんてね。駅に入っていく有理奈が見えたから、ついて来ちゃった」

声の主は結花だった。日だまりの色をしたスカートも桜色のカーデイガンもそのまま、装いは先程と変わっていなかった。わざわざ逆の方角に向かう電車に乗ってまで私の後を追っていたらしかった。それ程までに心配をかけていたのかと反省すると同時に、これだけ私のことを心配してくれている人がいるのだと思うとなんだか胸がこそばゆくなつた。

「なんだ、結花か。まったく、ずいぶんと回りくどいことを。ずっと見ていたのなら声をかけてくれればよかったのに」

「それだと有理奈がちやんと言いつけを守っているのか確認できないじゃない」

「もう、人が悪いんだから。でも…まあ、満更でもないかな。身を案じてくれる人がいるっていうのは」

柄にも無いようなことを口に出すと結花は照れくさそうに頬を綻ばせて両手を後ろに回した。ただ単に彼女が心理学の道に通じている身だからというだけでなく、こういうった人柄もまた彼女に青空の事情を話した要因の一つとなつたのだろう。

「それにしても、ここはどこなの？この辺りで降りたことが無いからよく分からないな」

「この駅名にもなっている明？寺にはね、庭園があるんだ。そこを少し回って、後は買い物でもして帰ろうかなって考えていたんだ。駄目かな？」

「良いと思うよ。こういうのは行うこと自体に意義があるから、本人にとつて気晴らしになるのならそれでいいんだよ。それに適度な運動をするっていうのは心にも体にも良いしね」

そうやって微笑む結花の声か、視界の隅に映った開きかけの桜の蕾か、何かが私の中に残る欠片とも言い難いような小さな記憶の断片を思い起こさせた。今まで思い出しもしなかった、もうそれがいつのことだったかすらも分からないような遠い昔の思い出だった。

それから二人の間で話し合いが行われ、金曜日の夕方、もしくは毎週末の昼頃に小一時間程度、内容としては発声の練習やカウンセリಂಗ等を中心に行われることが決まった。そして、その際に私のような第三者はできる限り傍にいない方が好ましいということだったので、場所はここから離れている結花の部屋が選ばれた。その日の夕方に青空から、それからすぐに結花からもそういう話があった。

その初回が今日なのだった。終わり次第結花から連絡が来る手筈になっており、その間はずっと一人になる。もう終わってしまった鶏肉の仕込みの他にやるべきことも見つからなくて、漂うようにテレビの前に座った。たしか以前はこうしていた。一年と少し前までは一人でここに暮らしていたはずなのに青空がいなくなったこの空間はまるで借り物のようで、単に彼女がいないだけの時とは何かが違っていた。四年前に高校に近いからと無理に借りたこの部屋は二人では狭く、一人ではあまりにも広すぎた。

青空と再会するよりも前、一人暮らしをしていたあの頃は毎日がこうだった。話す相手も無く、話すようなことも無く、耳に入るのは生活音とテレビから聴こえてくる声ばかりだった。ともすれば今よりもずっと音の無い生活だったのかもしれない。下宿をしている者が物珍しいのか時たま当時のクラスメイトがここに来ることもあったけれど、それもせいぜい片手に収まる程度の回数だった。孤独な夜を重ねる毎に彼女への未練とあの場所を出て行ってしまったことへの後悔が強まって行って、その度に『これでよかったのか』と『これでよかったのだ』がぐるぐると円を描いた。

私の思い出していた青空の姿は最後に会った時のままでずっと止まっていただけに、三年ぶりに会った彼女の些細な変化にさえ驚いた。まるで錆びて合わなくなってしまった鍵のように、彼女はあの頃の面影を残したまま、やはり線の中の一点にはなれないでいた。例えば流れる川は変わらずとも、そこに同じ水が帰ることなどありはしなかったのだった。

「あの…もしかして、杉本さん、ですか？」

あの日、最初に話しかけてきたのは青空の方だった。掲示板を取り

困むざわめきと歓声を背に受けながら、自分の番号があることを確認して踵を返した私に彼女はそう話しかけてきた。振り返るまでも無く青空の声であることは分かっていた。いやに遠慮がちな声だったけれど、この誰も私のことを知らない町の、誰も私のことを知らない人混みの中で私の名前を呼ぶその声はまるで遠雷のように鮮明に聞こえた。

「やっぱり有理奈だ。久しぶりだね。こっちに引越したって聞いていたから、もしかしたらと思っていたの。元気にしていた？」

「まあ、ぼちぼちな。中学生の時以来だから、かれこれ三年ぶりになるのかな。今ではすっかり一人の生活が板に付いてきたよ」

久しぶりに会った彼女は少し背が高くなっていった。当然ながらも中学校の制服も着ていなかった。そして何よりも、二人の間にある全てがああ頃よりもぎこちなかった。彼女は、そして私自身も、言葉にし難いくらいに小さな所で変わってしまった。守る為ではなくて逃れる為に、本人すらも気付かない内に仮面を被っていたのだ。互いに見ぬ間に、それぞれの場所で。

「そんなことよりも、どうしてここに？あそこにも大学なんて沢山あるのに。それに、ここはずいぶん遠かったでしょう？」

「それだけが理由ではないけど、国公立の大学の方が学費が安く済むからね。だけど、私の学力だとどこも一筋縄ではいかない所ばかりだね。ここはまあ、少しでも可能性を高める為に受けただけなの。残念ながら合格できたのはこのこと、いわゆる滑り止めの学校だけだったみたいだけど」

「そっか。それでも、ここに合格できただけでも十分にすごいよ。傍で見えていた訳ではないけれど、青空はよく頑張ったと思う。もっと自分に自信を持ちなよ」

「そうだよね。うん、ありがとう。それでさ、有理奈の方は、えっと、その…どうだった？」

「ちゃんと合格していたよ。人文学部の文化学専攻。青空はどの学部を選んだの？」

「よかった、おめでとう。学科は違うけど、私も人文学部なんだ。これ

で四月からは一緒に通えるんだね」

努めて懐かしがるような素振りはしなかった。そうしてしまうと、なんだかあの頃の関係が全て嘘になってしまふような気がしたから。いや、そうであることを認めることになってしまふから。青空もきつとそうだったのだと思う。続いていく今が過ぎていった日々の延長線上にあると信じ込みたくて、その為に関り出された言葉が寒空の下で空回りしていった。

「私の知り合いは誰もいないから、知っている人がいると気が楽だよ。それで、ここに通うつてことは、やっぱりどこかに部屋を借りるんだよね?」

「うん。流石に家からは通えないからね。お金はかかるけど下宿先を見つけないと。それも兼ねて今日はここまで来たんだよ」

『それならさ、私の部屋と一緒に住もうよ』。その言葉を形にする為に、口の中で数度それを転がして、その場限りの仮初の勇気を借りた。そこに別の意図が無かったとは言いい切れないが、間違い無く彼女の力になりたいという純真な心から出た言葉だった。その一方で、どこかあの夜の約束を指でなぞっている自分も、確かにそこにはいた。

それから青空は何と言ったのだったか。その先はよく覚えていない。私は彼女の返事に対して『これからまた、よろしくね』みたいなことを返し、彼女もまた同じようなことを口にしたはずだ。

そうして引越しやら諸々の準備を終えて、彼女との生活が始まった。それが去年の桜の蕾もまだ開かぬ三月の末のことだった。それから九ヶ月後、青空は誰とも話せなくなってしまった。

「もうじき、五ヶ月になるのか」

五ヶ月、というのはもちろん青空が病気になってから今日までの期間だ。今はまだ、この期間の方がそれ以前よりも数ヶ月ばかり短い。そうであるのに、実の所、私はこうなってしまうよりも前の青空のことをあまりうまく思い出すことができない。転がっていくみたいに過ぎていくありふれた一日一日の中に、側溝の縁に咲く名前も知らない小さな花のようにただ彼女がいた。彼女がそこにいることに何の疑問も抱こうとしなかつた愚かな私がいた。皮肉なことだけれど、思

中で彼女は私にそう言ってくれた。酷な事ではあるけれど、事実としてその言葉には本当に嘘や偽りは無かった。かつての彼女はよく知人達に囲まれていて、学内での私や結花との関わりは今ほど多くはなかった。平たく言ってしまうえば、あの部屋の外へ出てしまえばもう私達は互いに別の世界の住人であったのだ。しかし、その人達も年が開けてしばらくするといつの間にもやらいなくなってしまった。その理由などわざわざ言うことではないだろう。彼女に求められていたのは『普通』の人であることだったのだ。皆と異なる特徴を持たず、皆が有するものだけを持つていような、そういう人だったのだ。そしてその皆がいなくなった後で、最後に私と友人の結花だけが残った。だから、結花がいるとはいえどもそんな彼女を置いてどこか別の場所に向かうという行為には及べないでいた。しかし、それと同じ日に彼女はそんな私の態度を拒んだ。憐憫などという残酷なものはいらないのだと、青空はそう私に示した。そんなはずは無いと思っけていても、青空の瞳に映る私は知らない内に彼女を『そういう目』で見えたらしかった。

その夜から今に至るまで、そのことがずっと自分の心を悩ませていた。はたして私は彼女に対してほんのわずかでも後ろめたい感情を抱いていなかったと言えるだろうか。どこかで優越感のようなものを感じてはいなかっただろうか。それは今も無いと、そうはつきりと言いつけるのだろうか。父の事もやはり大きな問題ではあるものこちらもまた同じくらいに、ともすればそれ以上に心の水面を掻き乱していた。

「きつと…違う、はず」

私は強い意思を持って『そんなことは無かった』とは言えなかった。完全には否定できなかったということ、それはつまりそういうことなのだった。今まで気付きもしなかった、気付こうともしてこなかった。けれど本当は言葉にならない内に自分自身がそれを一番に理解していたような気がする。私はただ、彼女と一緒にいたかっただけだった。そのはずなのに。私はたぶん、ひどく醜い心の持ち主だ。

『次は、榎沢町。榎沢町に停まります。お出口は右側です』

とで、胸中にはささくれくらしいの痛みも無かった。

病室へと向かう間中、早まる鼓動を抑えようとガラス張りのエレベーターから見える院外の様子に視線を注いでいた。そうしている間は気休めくらいには不安も薄れてくれた気がした。それは父の安否に対する不安というよりは、ただの我が身可愛さによるものだった。実は父はもう目を覚ましていて、入室した私とまた言い争いになるのではないか。そんなことはきつとあるはずが無いだろうに、深く根を下ろした薄い影を拭い切れないでいたのだ。眼下の通りでは子どもが手を引かれ、人が歩いていて、車がゆつくりと走っていた。そこに笑顔は無かつたけれど、苦しい顔をしている者も無く、何の狂いも無く皆の日常が進行していた。青空と私が住んでいたあの町は見えている範囲とは真逆の方向にあるのでここから見るとは叶わなかつたけれど、きつとあの町でも同じように変わらない営みが続いているのだろう。私の家族はもう一度その中に入っていけるのだろうか。私はどちらがいいのだろうか。私は父がどうなってほしいと思っっているのか、少し分からなくなってしまった。

病室の前で二度、扉に触れたまま三度も意図的に深く息を吸っては吐いた。病室を間違えてはいないかと四回は部屋の番号を示すプレートを確認した。そこは集中治療室の個室であり、受付でも聞いた通りの番号だった。まさしく私が向かつていた部屋であり、その向こうでは父が眠っているようだった。鈍い動きで扉の前のインターホンを鳴らす。応対した人に再度父とは家族であることを説明してから入室時の手順や注意を受け、重い足取りで中へと進んだ。

面会の許された時間は本当にごくわずかなものだった。他にも部屋に入る為に煩雑な手順が必要であったり、一日に行う面会の回数や人数に制限があったりと、様々な点において素人目にも父の容態の深刻さが見て取れた。部屋には他の面会者は誰もいなかった。中央のベッドの上に頭を起こして仰向けにされた状態の父がいるだけだった。様々な機械が生気の無い父の周囲を取り囲んでいて、そこから伸びる管が父を繋ぎ止める鎖となっていた。父が私を叱るようなことは無かつた。体に取り付けられた様々な器具や呼吸器のような

また同じ夢を見た。やはり題名が読み上げられることは無かった。今度の劇はとある男性の生活をただ淡々と描いただけのものであるようだ。今度はパンフレットを持っていかなかったが頭の中でそう理解していた。

男には妻と娘の二人の家族がいた。スポットライトの当て方の中で顔はよく見えなかったが、主人公の背格好や歩き方にはどこか見覚えがあった。劇が進むにつれて少しずつ登場人物達の背丈や装いが変わっていく中で、どれだけ時が進み季節が巡っても同じような台詞だけが定型句のようにならずと繰り返された。そしてたまに違う言葉が聞こえたり、声を荒らげたりする、そんな退屈なものだった。

『おかえりなさい』

『ただいま』

『おかえりなさい』

…

『おかえりなさい』

『ただいま。おい…』

…

『おかえりなさい』

『ただいま。おい…』

…

『おかえりなさい』

『ただいま』

思わず席を外したくなるくらいに冗漫で展開には起伏と言えるものが何も無く、一向に終わりが見えない。なんともつまらない劇だった。そこには何も感じ取れるものなど無いはずなのに、それなのに、不思議と目を離すことはできなかった。

『これで、よかったの？』

誰もいないはずの場所でその声が劇場の中を駆けた。台詞ではあるようだが、誰が発したのかも、どこから聞こえているのかも分からなかった。言葉そのものは確かに耳に入っているのにその声が男性のものなのか女性のもののかすら判別できなかった。その台詞に

対して言葉を返す者はいなかった。行く瀬の無くなったその声は奇妙なくらいに残響を置き去りにして舞台袖の方へと去っていった。それと時を同じくして、その方向から会場全体に何か倒れたような音が響き渡った。そこで唐突に舞台の幕は降りた。これの何が面白かったのだろうか、後ろの席からはちらほらと拍手の音が聴こえてきたけれど、私はそこに誰がいるのかなど気にも留めなかった。

そのままカーテンコールも無く辺りが明るくなった。どうやらこれで終わりのようだった。私は席を立って隅の階段から舞台へ上がった。向かうのは先程大きな音がしたカーテンの裏の方だ。乱雑に散らばった小道具達を避けて進んでいく。暗がりでも周囲はよく見えなかったけれど、どうしてなのかそこに何が置かれているのかは全て知っていた。奥の方にある全身を映せるくらいの鏡台の裏、そこへまっすぐに手を伸ばしてトランジスタラジオを拾い上げた。それがそこに置いてあることが、そしてそれを手にすることが、私にはごく自然なことのように思えた。そこから踵を返して舞台を降り、出入口の厚い防音扉を開く。いつか聴いた足音はその奥に向かって駆けていった。

扉の向こうには果ての見えない廊下が続いていた。そこに等間隔に並べられた顔の見えない人達が何かを言う訳でもなくただこちらをじっと見つめていた。その人達の横を一瞥もくれないこと無く足早に過ぎていく。廊下の先には茜色に染まった世界があった。

そこはどこにもでもあるような教室だった。規則的に並べられた机の天井には黄金色の西日を溶かし込まれ、入口のドアの横には綺麗な黒板が据えられている。その壁は石膏のボードで覆われており、部屋の隅には夜と同じ色をしたグランドピアノが置いてあった。ここは音楽室のようだった。

一つだけ引かれたままの木椅子にラジオを置く。振り返るとどこにも劇場は見当たらず、どこまでも続いて見えるリノリウムの廊下に置き換わっていた。恐る恐る椅子に座ってピアノと向かい合ってみる。胸の奥が痛むような、あるいは掻きむしりたくなるような、けれど心地良さを勝る気持ちになった。

『弾いてみてよ。久しぶりに』

先程の劇場で聞こえたものとは違う声がラジオからノイズ混じりにそう話しかけた。中央の鍵盤を弾こうとする毎に手先が痺れて指々の関節が石のようになってしまった。どうしてもそこから先へは進めなくて、何度も指先が空回りしては虚を撫でていく。

『大丈夫。もう誰も止めはしないよ』

まるで優しく背中を押してくれるような、胸のつかえを取り払ってくれるような、その声にはどこか不思議な力があつた。言われるがままに一通りの音階を鳴らしてみても音のずれを確かめる。調律に全く狂いは無かつた。その手のままに十本の指をモノクロームの舞台上で踊らせる。演奏者は私一人だけ、聴衆もまたたった一人だけだつた。演奏するのはシューマンの『子供の情景』。あれだけ練習したのだ。譜面は無くともこの手が全てを覚えていた。

黒鍵の沈む感触を思い出した。白鍵を押した時の抵抗がひどく懐かしかつた。そこには時間なんて存在しなかつた。けれど、軽やかに弾む指とは裏腹にその音はいつまでも所在無さげで、躊躇いがちに孔だらけの壁へと飛び込んで消えていくばかりだつた。途中で黒鍵に向かうはずの指が逸れてしまった。私はそこで手を止めて、もう弾き直さなかつた。名残りも何も抱かずに静かに蓋を閉じる。何かが一とつ、足りなかつた。

ピアノの屋根を閉じようと腰を上げると足下にパステルカラーの上履きが二足、隣同士に揃えて並べてあるのが目に入った。一步後ろへ下がって自分が履いている物と見比べてみる。二足とも今の私のそれよりも少しばかり小さく、私の履いている靴はほとんど黒に近いどどめ色に染まってしまうていた。ここでも何かがひとつ、足りなかつた。その何かを探すようにトランジスタラジオを片手に部屋を出て、窓の外の木々に沿って歩いていく。それが何であるのかを本当は知っていたし、ここには無いということもまた理解していた。けれどもそのこと自体が霧の中にいるみたいにあやふやになって、私の足を一步、また一步と前へ運ばせた。

ラジオも私も、何も言葉を発そうとはしなかつた。扉が霞んで見え

なくなっても私達は光に惹かれて翔ぶ蛾のように呆然と彷徨い続けた。いつの間にか屋根は無くなっていて、私は校舎の外を歩いていった。空には厚い雲が広がり、地面はコンクリートに覆われていた。暗雲が更に黒に染まり雨粒が頬を濡らした頃、いつしか辺りはかつてよく見た景色になっていた。目の前には父のいた場所と『杉本』の表札が見える。明滅する淡い灯りの下には翡翠色の翅が散らばっていた。

『違う。ここじゃないよ』

その声に導かれるように丁の字になった路地を左に折れる。立ち止まったのはほんの少しの間だけで、すぐにまた雨に身体を濡らしたまま歩き始めた。傘はどこにも無かった。町の外れにある小さな公園を、暗い裏通りを、十字路の傍にある電話ボックスを、傘もささずに過ぎていく。道すがら側溝の縁で何かの灯に煌めいた気がしたが、それにはもう目もくれなかった。私が探していた何かは、傘でもあった。そして誰もすれ違うことは無いまま、赤い屋根の家の前で足音は一度止んだ。

『違う。ここじゃないよ』

そう、ここじゃない。彼女がいるのはこの町ではない。明かりの無い二階の一室に視線を流してから糸が吊られているような気分ですた足を動かす。それが本当に自らの意思によるものなのか、今や明確に判断することができなかった。雨は未だに降り止む兆しを見せていなかった。

郊外の方まで来てもその単調な動作は止まらず、遂にはこの記憶の地図の端にまで来てしまった。道の奥には数本ばかりの街灯が枕木のように頼り無く佇んでいる。この道がどこへ続くのかも、そしてその先に何があるのかも、ここにいる私は何も知らない。

「まだ、ここじゃない」

だからもう一步、足を前に出す。ラジオはここに置いていってしまおう。傘を探すのは、もうやめた。

目が覚めると空はまだ暗く、時計を見ると日が昇るにはまだかなり時間があつた。ぬばたまの町では電車もバスも皆が眠っていた。開

だった。実家に戻ることはもう既に決められていたとはいえ、やはり自ずと彼女に対して罪悪感が湧いてくるのだった。彼女を置いていってしまうことへの罪悪感が。

「…ねえ青空。私は今も、『そういう目』をしているのかな」

今すぐ洗面台の前に行つて鏡に映る自分の顔を覗いてみれば、そこにはきつと見飽きたくらい変わり映えない自分が晴れない顔をして立っていることだろう。何の変哲もありはしないいつもの瞳といつもの口と、眉と、鼻と、そして表情だ。そうしてその目は語るのだろうか。そう思ってしまうのは今の彼女が自分よりも弱い者だからだと。

彼女は病気を患っており、誰かの助けを必要としているという認識は今でも間違っていないと思っている。しかし、たったそれだけのことがこの眼差しを作り上げた唯一の要因なのだろうか。自分のあやふやな心もまた、このふつつつと音を立てる鍋のようにその底を見通すことは出来なかった。

固定電話に着信があつたのは鍋を煮込み始めてから二時間くらいが経過した頃だった。コール音が二度鳴るよりも早く火を弱めて台所を出た。母親は私の携帯電話の方の番号しか知らない。となればおそらくは結花からの電話だろう。表示された電話番号を確認するとやはり彼女のものだった。きつと今日行われる青空のリハビリテーションについてのことだろう。しかし、私は二人のことには極力干渉はしないようにしているし、結花もまた最低限必要なこと以外はなるべく話さないように気を配っている。そういつた事情から、青空のことについて彼女から連絡を受けることなど本当に稀であつた。

「はい。杉本です」

「もしもし有理奈？突然ごめんね。ちよつと訊きたいことがあつて。えつと、今は一人？」

結花は藪を探るような声でそう訊ねた。おそらくは青空に関することで他言できないような何かがあるのだろうが、まさか私が誰かに言いふらしたりなどしないことくらい結花だって承知の上のことだろう。ましてや今はこの部屋には私しかいないので尚更だ。その質

問の真意を探りかねて私は沈黙の内に肯定の意を示した。結花はそれを汲み取り、鈍い動きで息を一つ吸ってから話を先へ進めた。

「そう。誰もいないんだ…あのね、藤崎さんがまだ来ていないの。いつもならここに来る前に何か連絡があるはずなのに、それも受けていないから、もしかしたらそこにいるんじゃないかなって」

分かり切ったことなのについて反射的に振り返って室内を見回した。そこにあつたのはやはり今は誰もいない寂しいダイニングルームだけだった。慌てて自分の携帯電話を確認したがこちらにも新しい連絡は来ていなかった。

「電話はしてみたの？単に青空が今日のことを忘れてるだけかもしれないし…」

「そう思ってたさっきから何度もかけてみたけれど、全然繋がらないの。メールを送っても返信が無いし、どうしよう」

何の言伝も残さないままどこかへ行くなど普段の彼女からして考えにくいことだった。そうそう起こりえない話だし、あまり想像したくはないことだが、青空の身に何かあつたのではあるまいか。そんな考えが思い浮かんでしまつて全身を冷たい血が流れた。結花も同じような考えに至つたのだろう。言葉の端に動揺の色が隠せないでいた。

「…青空を探してくる。もしかしたらこの近くにいるのかもしれない」

「待つてよ有理奈。私はどうすればいいの？」

「結花はいつ青空が来てでもいいようにそこにいる。何かあつたらまた連絡するよ」

いても立つてもいられなくなつて、別れの挨拶も無しに追い立てられるように受話器を置いた。そのまますぐに鍋の火を止めてから、何も持たないで外へ飛び出した。

どこかにある訳でもなかったが、だからといってその場でじっとしてなどいられなかった。

家を出てから色んな所を探し回った。駅前の広場や辺りの公園など、この町を一巡りくらいしてみてもそのどこにも彼女はいなくて、

今はどことも知れない人通りの無い路地裏を歩いている。もう一駅分か二駅分くらいは歩いただろうか。道もよく知らないのに闇雲に歩いたせいで私自身が今どこにいるのかすらも怪しかった。いつしか空には西から流れてきた暗雲が広がり、灰をばらまいたみたいな曇天に変わっていた。ここにも彼女の姿は見当たらなかった。

青空は傘を持っていっただろうか。足を止めて玄関の景色を思い出そうとする。自分の靴の隣には彼女のいつもの白いスニーカーが無くて、芳香剤が少し減っていた。傘立てはどうだっただろうか。そこに私の傘はあったことだろう。その隣には何かあったか、何があったか。視線を路地の向こうへと戻す。

「青空、どこにいるの？」

この辺りにはいないと分かっているのに、意味も無く彼女の名前を呼んでみる。呼び声はどこへも行くことは無く夕方の肌寒さを覚える空気の中へと消えていった。返事の代わりに空は冷たい雫を髪の毛先に伝わらせていき、それを合図に雨音がたちまちに全ての音を覆い尽くした。掌を虚空にかざして指先から滴る雨だれを見つめる。青空は今頃どこで何をしているのだろうか。青空が行きそうな場所など全く見当がつかないし、彼女がどうしているのかも、どうしてこうなってしまったのかも私にはまるで分からなかった。

例えば、私は何も見えてはいなかった。彼女が自ら見えない檻に閉じこもって他の誰にも触れさせないようにして、ずっとひとりぼっちで自分の心を守ってきたから。だから、私も彼女の見えない所ではなくて私が見ようとした所だけしか知らないでいられた。孤独を知るのは悲しい。孤独に慣れてしまうのはずっと辛い。私が必要とするの理解していたはずだった。それなのに私は柘榴の実にその種子に、仮面を被って痛みを押し込めた彼女の傷に目を向けようとしてこなかった。そうやって彼女が苦しんでいてくれれば日常に入ったひびが広がらずにいてくれたから。そんな私が今更になって彼女の身を案じるなど、そんな虫の良い話が許されるだろうか。

「…青空は、どんな気持ちだったのかな」

そう呟いて空を見上げると夜が来るにはまだ少しばかり早い時間

だった。青空も私も、あの時はまだ携帯電話など持つてはいなかった。今日と同じ晩春の雨が降っていたあの夜、公衆電話の受話器をたった一つの頼りにして彼女の声を聞いた。そして私の手には一枚の十円硬貨が握りしめられたまま、言えたはずの言葉と共に受話器を置いたのだった。私の居場所を知る術など無いのに、会える確信などありはしないのに、青空はただ私の身を案じるその一心だけであの雨が降る町の中でそんな私を探し回っていた。当時の私では気付くこともできなかつたその気持ちが今なら少しくらいは分かる気がする。彼女はちゃんとこの雨をしのげる場所にいるのだろうか。無事できてくれているのだろうか。彼女の気持ちの一欠片すらもこの手で掴むことはできなかつた私だけれど、紛れも無く青空のことを心配していた。それだけは確かなことだった。

「行かなきゃ」

一つ息を吐いてまた歩きだす。真っ白な砂の上から拾い上げるように、目をやれないでいたこと、目を背けてしてしまったもの達を見つけないで私は歩調を早めた。ポケットの中で部屋の鍵がちりんと音を立てた。

更にもう一駅分くらい歩いた所で私のよく知っている通りに出た。まだ彼女が見つかったでもないのに、私は知らない内に自宅の辺りに戻っていらした。かなり前にもう夕日はここではないどこかを照らしに行ってしまった。厚い黒雲の向こうにあるはずの星達も私達には見向きもしない。あの時のようにもう一度偶然が起こってはくれまいか。そんな思いが濡れて冷えた頭を掠めて、それと時を同じくして携帯電話の通知音と雨粒が潰れる音とが入れ替わった。誰かからの着信ではなかった。受信トレイを確認すると新着のメールが一件追加されていた。差出人は青空だった。件名は無く、本文には「たつたの一行、『私を探していたの?』とだけ書いてあった。『よかった。ずっと連絡が取れなかったから、何かあったのかと思つたよ。今はどこにいるの?』」

彼女に連絡する意思がある内にすぐさま返信を送った。今までどこにいたのか、どうして結花の元へ行かなかったのかなどは訊こうと

気のことも含めた彼女の状態について伝え、そのまま救急車にも同乗した。彼女は今は診療を受けに席を外しており、その間を見計らって院内にあった公衆電話から結花に電話をかけた。後ろで待っている人もいなかったもので、誰にも会話を聞かれる心配が無い分辺りをはばかるような気持ちは薄れた。結花もあれからずつと連絡を待ち続けていたのだろう、私の声だと分かると彼女は私が名乗るのも待たずに『藤崎さんが見つかったんだね!』と訊ねてきた。

「そう。なんだけど、それだけじゃなくてね。話せば長くなるけど、青空がちよつとした事故に遭っちゃって、今は病院にいるんだ」

「事故!?! いったい何があったの?! いや、それよりも、藤崎さんは無事なんだよね?」

「アパートの二階の柵が壊れてそのまま青空も一緒に落ちたんだ。まだ結果は出てはいないけど、激しい出血はしていないし、意識もあるからたぶんそれほど酷いことにはならないと思う」

「そう、なんだ。よかった。ずつと音沙汰が無かったから、心配で心配で。とりあえず、命に関わるようなことにはなっていないようだから本当によかったよ」

受話器の向こうで彼女が息を漏らすのが聴こえた。そうなっていると次に気になってくるのは当然、青空がいなくなってしまう理由だろう。私もここに来るまでの道中や待合室でも自分なりに考えてみたが終始分からないことだらけだった。

「それにしても、藤崎さんはどうしてこんなことをしたんだろうね。何か思い当たる節はある?」

「それが、私にも分からないんだ。腕を怪我したみたいで今は筆談することもできないし、こればかりは確かめる術が無いよ」

詳しいことは分からないけれど、今日の一件は青空にも思う所があつてのことだろう。きつと私の行いもその一端を負っているはずだ。そんな私に彼女を問いただす資格など無いのではないだろうか。全てが昔のことになって、青空が全てを話してくれるまで待つのではないだろうか。

「だけど、このことはきつと、青空にとってはあまり触れられたくない

「ことだと思うんだ」

「そう。そういうことなら、私達の方からもなるべく話題に挙げるようにしようか」

「そうしてくれると助かるよ。それとね、結花に一つ頼みたいことがあるんだけど、明日と明後日って空いているかな？」

「土曜日と日曜日？たしか何も予定は無かったはずだと思うけど、それがどうかしたの？」

「居合わせた現場で見た限りだと、おそらく青空の右腕が折れているみたいなんだ。誰かの助けが必要なんだけど、私は日曜日に法事があるからその移動の為に明日の午後には家を出ないといけないの。だから結花には私がない間、青空を助けてあげてほしいんだ」

「利き腕が使えないとなると日常生活の様々な場面で支障が出ることだろう。事情が事情でなければ私もここに留まっていたかったし、そうするべきだった。結花は『予定を確認してくる』と言って保留もせずに受話器から離れた。それから少しの間だけ忙しそうな足音が行き来して、すぐに『その日なら大丈夫だよ』という声が聞こえてきた。」

「ありがとう。結花には、このこと以外にも色々とお謝らないといけないね。今日のことはきつと、青空だけじゃなくて、私も何かを間違えていたんだと思うんだ。だから、ごめん」

「:..どうして私に謝るの？私だって、いっぱい、いっぱい間違えてきたのに。そんなの、自分勝手だよ」

彼女の声は穏やかなままだった。それでいて矢のように鋭く尖っていて、少しばかり震えていた。その濁った声の中心にあるものを私はまた探し当てられなかった。分かったことはただ一つ、私はたった今、また石を取りこぼしたのだということ。たったのそれだけだった。

「ごめん。今のは聞かなかったことにして。やっぱり、二人とも似た者どうしだな、って。とにかく、私は怒っていないから。藤崎さんにそう伝えておいて。それじゃあ、また」

「こちらが何か一言すら返す間も無いままに電話は無造作に切られ

た。物言わぬ私の傍らでは緑色の受話器だけが人には持ちえない空っぽで甲高い音を投げかけ続けた。大きな間違いとたくさんの分らないこと達が、今日もこの掌に積まれていく。

病院を出てここまで帰ってきた時には雨はもう降り止んでいた。その頃にはもうビーフシチューはすっかり冷めていた。検査の結果、青空の右腕の骨は二つに折れていたものそれ以外の箇所は損傷はそこまで酷くはなかった。それで、病院でギプスを巻いてもらうだけで入院の必要は無かった。

「ビーフシチューを作っておいたんだ。かなり遅くなったけど夕飯にしようか。それとも先にお風呂の方がいいかな？」

彼女が首を横に降ったのでつまみをひねって鍋を温め直した。こういう時に作り置きという物はないが。それにこれなら青空も左手だけでも食べられるだろう。本来はこの為の物ではなかったけれど、家を出る前に作っておいた。ダイニングルームからはどこか気だるげなテレビの音が聴こえている。時間帯からしてバラエティー番組の類だろう。普段の彼女であれば今の頃合ならあそこか自室でも読んでいるのだろうが、あの手ではそれもできないようだ。あのような騒がしい音はかえって静寂を引き立てているように私はどこと無く好きにはなれなかった。

事故が起こったあの時、私もその場に居合わせることはできて本当によかった。レールドルを片手で回しながら考える。もしも私が来るよりも早く青空が病院に運ばれていたら、あるいはそれがあのメールを受け取るよりも前だったとしたら、きっと私は今もまだ彼女を探し回っていただろう。

「…それで、何がよかったのかな」

どろりとした軽い抵抗がレールドルの柄を伝う。私がいたからといって事故が防げた訳でもないし、青空の痛みを取り除くことができたなんてことも無かった。私は何もできなかった。だから、今の私も、こんな顔をしているのだ。青空が見つかってよかった、入れ違いにならなくてよかった、大事には至らなくてよかった。いったい誰がどう『よかった』のだろう。青空は辛そうな顔をしていて、私は何一

つできず、結花とはすれ違いを起こしてしまった。本当にこれで『よかった』というのなら、どうして皆が笑顔でいられないのだろう。知らない内に鍋はぼこぼこ音を立てながら気泡を浮かべていて、私は慌てて火を止めた。

数ある日々の動作の中でも、右腕を固定していることの不便さが特に顕著に現れたものの一つが食事だった。利き手でもない左手で扱える食器となると限られていて、必然的に箸の代わりにスプーンやフォークなどを使わざるをえなかった。青空は先程から慣れない手つきでゆつくりとスプーンを口元に運んでいるが、その何度か一度くらいの間隔で敷物の上に点々と染みが散らばった。これから数週間くらいはなるべく楽に食べられそうな料理を作った方がよさそうだった。

「大丈夫？私が食べさせようか？」

私の手を煩わせたくなかったのか、青空はその言葉に対して二回、少しして私が『無理しなくてもいいからね』と言うと更にもう二回首を横に振ってそれと同じ分だけ染みを作っただけでいき、その後もその数を増やし続けた。私が食べ終えて食器を運んだ後もそれは止まっていなかった。見かねてもう一度同じ言葉を繰り返してみたが、彼女の返事は変わらなかった。

遅い夕食を終えて一段落した頃には時計の針はもう既に夜の九時を通り過ぎていた。青空は自室へは戻らずにダイニングと一緒にニュース番組を見ている。テレビではアナウンサーが淡々と今日の出来事を話している。白いはずの壁がそこはかとなく青みがかって見える。普段と何も変わらないはずの部屋が不思議といつともよりもずっと静かに感じた。私は他の物に目を向けられなくて、彼女と同じようにテレビに映る機械的な口の動きを眺めているのだった。

「お風呂、どうしようか」

画面から視線を外して青空へと向ける。それに連なるように彼女もそうした。どうしようか、というのは別にまだ湯を沸かしていないなどということではない。医者からはなるべく血行を良くしないようにと言われたため、青空を風呂に入れられないのだ。また、ギプス

を濡らしてはいけない上に水を防ぐ為の何か知らを巻こうにも本人が痛がるので、シャワーを浴びさせることもできなかつた。

「せめて体を拭くくらいはした方が良いよね。一人でもできそう？」

青空は重たげに頷くと鈍重な動きで腰を上げ、ピンチハンガーからタオルを一枚取って自室へと戻っていった。耳をそばだてて向こうで扉が閉まる音をしつかりと聴いてから、充電していた携帯電話を手繰り寄せる。メールの作成の項目を開いてリストの上から二番目にある結花のアドレスを選択した。先程のやり取りの事もあつて電話をかける気にはなれなかつた。

『夜遅くにごめんね。さつき病院から帰ってきたから、その結果を結花にも伝えておきたい。先に結果を言うと、他の箇所は打ち身くらいで軽傷で済んだみたいだけど、やっぱり右腕の方は折れていたみたい。医者の話では五週間くらいはずつと固定していなければいけないらしいから、今回だけに限らずにしばらくの間はまたこういうことをお願いするかもしれない。私もできる限り青空から離れないようにするけど、どうしても学校の方でも結花に頼らなきゃいけない時がきつとあると思う。いつも結花に押しつけてしまつてばかりで悪いけど、その時はどうか助けてあげて』

送信のボタンに添えた親指が二の足を踏む。ろくに読んでもいないのに本文に繰り返し目を通してからやつと押すことができた。何かの用事で手が離せないのか、それともまだ返事を書いている途中なのか、しばらく待つてみても結花からの返信は無かつた。三、四回くらい受信トレイが空であることを確認してから、私は後ろめたさを抱えながらそそくさと廊下へ出た。何かしらの用がある訳ではなかつた。意味は無くても、ただこの場から逃れたかつたのだった。

私の足は玄関にたどり着く前に青空の部屋の扉の手前で停止した。足の裏に冷たい何かに触れて下を見ると、そこから洗面所までの狭い区間に水滴の破線が引かれていた。彼女の名を呼びながら指の背で扉を軽く弾く。

「入ってもいい？ やっぱ一人では大変だろうから、何か手伝えなかなと思つて。嫌なら一回、いいなら二回ノックしてほしいな」

何も音はしなかった。鍵の無い扉の隙間からは冷たい光が漏れていた。そのまま少し時間が経って、私がおずおずと再び彼女に呼びかけるとすぐに向こうから床を叩く音が二度聴こえた。その音はどこか投げやりに扉の向こうまで放られて、がらんとした廊下を抜けていった。

ドアノブは雨に降られたみたい濡れていた。柄の無いカーペットの上に点々と連なる染みの先には上裸になった青空が背を向けて座っていた。彼女はこちらには一瞥もくれようとはせず、無造作に両袖の揃っていない服を掴んで胸元を隠した。その左隣には水の飛び散った風呂桶とずぶ濡れになったままのタオルが置いてあった。「痛みはどう? 腫れは収まってきた?」

先程の出来事を引きずっているのだろうか、私が彼女の後ろに座つてもまだその態度に変化は無かった。別に青空が何か言った訳ではないけれど、だからこそ彼女が纏う空気がそんな風に示している気がした。床のタオルに手を伸ばす。水を吸ったタオルはずっしりと重くて、軽く絞った途端に桶の水かさが増した。

「やっぱり。青空はもう少し私を頼ってほしいよ。せめてこんな時ぐらいはさ」

彼女の小さな肩にタオルをあてがって山脈のように並んで見える骨ばったその稜線をなぞっていく。布越しに彼女の肩甲骨の溝や脊椎のごつごつとした起伏が伝わってきた。色白で華奢な、弱々しい背中だった。腹の面から地面に落ちたおかげなのか、やり場の無さそうに佇むその背中は傷も無く綺麗なままだった。

「今日の事、私も結花も、青空を責めるつもりなんて無いよ。迷惑だなんて、誰も全く思っていないから。私達はね、青空の力になりたいんだよ」

両の掌が微小に震える。表情の見えない彼女の背にわずかに力がかもったのが分かった。その言葉に呼応するように布と布とが擦れ合う音がした。握りしめられた生地が皺を作る音さえも、私の耳には聴こえていた。

「…ぞろぞろ」

私の体はたぶん、指の一本一本の先に至るまで一寸たりとも動いていなかったと思う。正確に表すと、ほんの一瞬だけ自分の体の動かし方を忘れていた、というような感覚だった。今、私の鼓膜を震わせたその声は私の喉を通して出たものではなかった。

私の心の内に真っ先にやって来たのは感動や喜びといった綺麗な感情ではなく、ただの驚きだけだった。最初に自分の耳を疑った。それを内なる自分が奏でた慰めの音だと思った。しかし、両腕を渡っていった微かな振動はそれが疑う余地の無い確固たる現実であることを如実に証明していた。たつた今、青空は確かに喋った。私に向けて声を発したのだ。けれど、私の胸に何か他の感情が訪れるよりも早く、そして私の頭がその出来事を咀嚼する間も無いままに青空は次の言葉を紡いだ。

「どうして、有理奈はここまでしてくれるの？私が怪我をしているから？それとも私が病気だから？ねえ、そんなに私はかわいいそうなの？喋れないことが、怪我をしていることが。『ふつう』の人よりも足りないことが。もう、そういうのはやめてよ。同情なんて、いらぬよ。私だって有理奈や結花と変わらずに悲しんだり、怒ったり、喜んだりするんだよ。ただ、それが口にできないというだけで、皆は私をかわいそうな人にするんだ。皆が優しさを向ける度にそれを受け入れられない自分が醜く見えて、嫌いになるんだ。私はもうそれに耐えられなくなつて、だから、ここを出ていったんだよ。私はただ、『ふつう』でいたかつたんだ。有理奈や結花と同じことで笑つて、そして一緒に悩んだりしたかつた。二人と同じ世界にいたかつただけだった。同情してほしいだなんて、私はただの一度も望んでなんかいないのに。それなのに：もう、これ以上、私を苦しめないで」

青空の喉と唇からはまるで堰を切つたみたい言葉が溢れ出した。それは彼女がずっと声にすることができなかつた、そして私が今まで目を背け続けてきたもの達のすべてだった。声の端々が歪み、その途中で幾度となく途切れながらも、それでもその声は怒涛のように流れ続けた。

「ほら。私、喋つたよ。話せるようになったよ。これで皆と同じ『ふつ

う』になった。嬉しいも、苦しいも、ぜんぶ言える。藤崎青空はここにいるよ。だから、もう…」

「違う。違うよ」

気付けば自ずと彼女の言葉を遮っていた。言葉が意図せずにかから飛び出したような感覚だった。タオルから滴り落ちた水の軌跡が青空の背筋と重なる。まるで海の底に落とされた錨のような、そんな気持ち自分が放った言葉が耳に入ってくる頃には胸の奥に居座っていた。

「それは、青空が私にとって大切な存在だからだよ。だから、できるだけ辛い思いはさせたくないし、悲しませたくもない。その為に私にできることがあるのなら、全てやりたい。青空には笑っていてほしいんだ。病気だとか怪我だとか、そんなことが心配なんじゃないよ。自分にまで嘘をついて、誰の前でも平気な顔をして、なんでも自分一人のせいにしてしまう。そんな青空が心配なんだよ。人への頼り方を忘れてしまった、そんな青空が心配なんだよ」

怒りとも悲しみとも似つかない、どこにも名前が載っていない何かの声帯の震えに伴う。彼女に対してこんなにも感情的になるなんてこれが初めてのことだった。青空は私の言葉を聞き終えるまでずっと、火花が打ち上がる前のように口を閉ざしていた。

「…有理奈だってそうじゃない。自分ではどうしようも無いことまで全部抱え込んで、誰にも迷惑をかけないようにしているんだ。お祭りの夜だってそうだった。有理奈は私を蚊帳の外に追いやった」

「それは、青空に心配をかけたくなかったから…」

「そのどこが私と違うというの？ 有理奈は自分だけが頑張れば全てをどうにかできるって思っているんだ。私の苦しみすらも自分一人で肩代わりできると、そう思っているんだ。そんなはずも無いのに。私は、有理奈のそういう所が、本当に…嫌なんだよ」

青空はそう言い終えてから頭を垂らした。これでもう、この部屋の中を歩き交う言葉は何も無くなった。『やっぱり、二人とも似た者どうしだな、って』。結花が呟いた言葉が耳の奥で蘇る。また、すれ違いだ。自分が過ちを犯したことに気付くのはいつも誰かに教えても

かったけれど、あの学校を選んだ一番の理由は有理奈とまた話がしたかったからなんだよ」

青空はそこまで話して一度言葉を切った。途端に川のせせらぎがうるさいくらいにその空白を埋めていく。それと時を同じくして頭の上を時刻表には無い電車が通過していった。その音が止んだ頃、彼女は小さく息を吸ってこちらに向き直った。

「私が会いに行こうとしなかったのはね、怖かったからなんだ。もう一度有理奈に会って『あの約束を覚えている？』なんて訊いた時に、『そんなこともあつたね』って返されるのが。あの日のことが思い出になってしまうのが恐ろしかったんだ」

結花の言った通り、やはり青空と私は『似た者どうし』だった。もう手の届かないものから目を離すことができなくて、ずっとそこから進めないでいた。あの日の面影を探してばかりで、比べるものなど無いはずの今と向き合い切れずにいたのだ。一つの同じ線を二つに区切ってしまったのは、私も青空も同じだった。

「…私は、覚えていたよ。忘れたことなんて一度だつて無かった。あの夜から今日まで、ずっと。だけど、思っていたものとは違う形ではあるけれど、あの約束はもう果たされた」

けれど、今は違う。私達は変わっていくのだ。たくさんの間違いとすれ違いがあつて、今は前を向いている。これまでよりもほんの少しだけ。だからもう、きつと迷わない。何度だつて見つけ出してみせる。私達はもうひとりぼっちじゃなくなったから。

「だからさ、青空。いつか、あのアパートを引っ越して二人で部屋を借りようよ。一人用じゃなくて二人用の部屋を。あの頃を取り戻すんじゃないくて、もう一度やり直すんだよ。それが、新しい約束」

「…うん。約束」

橋の下を風が吹いていき、最後の花火がバケツの底に沈んだ。揺れる真つ黒な水鏡の上に見えた彼女の口角は緩んでいた。風の行く先に目をやると誰かが忘れて帰ったのだろう、大人用のサンダルが一足、草むらの陰からこちらに手を振るように落ちていた。

よく晴れた朝と昼の境目、いつもよりも遅い目覚めを傍らに夢見心地でいると眠気を覚ますような冷たさはもうここには残っていないかった。ぼんやりとした意識の中で眺めたコルクボードのカレンダーはまだ五月のまままで止まっていた。壁にかけた時計を見ると出発は午後からなのでまだ時間はあるものの、少しばかり寝すぎってしまったようだった。

そろそろ準備をしなければ。そう思いながら布団を畳んで部屋を出る。一人で暮らしていた頃は寝室に造られたクローゼットを使っていたのだが、青空と暮らすようになってからは廊下にある物置に自分の衣類をしまっている。生来衣服に頓着する性分ではなかったのも、特段困りはしていないが、やはりこの部屋では二人で住むには狭すぎるという印象はあった。

廊下の中程にある物置の奥からトランクケースを引きずり出して衣類や下着を詰め込んでいく。法要の為に道具を一揃い入れ終えた後で、喪服だけは皺ができないようにとクローゼットに吊るしてあったのを思い出した。玄関の方に目をやるとドアのチェーンロックはかかったままだった。

そつと扉を開け、足音を忍ばせながら部屋に入ると青空はまだ眠ったままだった。いつもは彼女の方が早起きであるだけに、こうして寝息を立てている彼女の姿は少しばかり珍しかった。起こさないように静かに用を済ませてこの部屋を後にしようとする、後方から衣擦れの音と共に小さな唸り声が聴こえた。

「有理奈…おはよう」

まだまどろみをたゆたっているくぐもった声にどこか感慨に近いものが込み上がる。湧いて出てくる色んな言葉を飲み込んで、私はただ『おはよう』とだけ返した。その返事を耳にして青空は嬉しそうに、そしてどこか気恥ずかしそうに目尻を解いてもう一度『おはよう』と言った。

「起こしちゃってごめんね。明日の法要で着る服を取りに来たんだ」「もうそんな時間なんだ。今日はいつもよりもいっぱい寝ちゃったな」

「まだ昼前だよ。準備を済ませたらお昼ご飯を食べて、しばらくしてから行くつもり」

まるでこれまでのことなど無かったみたいだに青空と私は言葉を交わしていた。今見ているものが甘くて優しい夢なのか、それとも昨日までの全てが悪い夢だったのか。この目の前の景色がそのどちらかだったとしても、私は現実であってほしい。そんな蒙昧な思いがよぎったのは私がまだ夢の影法師を踏んでいるからなのだろうか。

「私もそろそろ起きなきゃね。ご飯は有理奈が作ってくれているんだっけ」

青空がゆっくりと上体を起こす。いつも通りにベッドから出ようとして彼女は眉間に皺を作った。その右目は絞られたまま慎重な動きで布団をめぐって立ち上がった。その一連の動作において、彼女は至る所で右腕をかばっていた。

「大丈夫？ やっぱりまだ痛むの？」

「昨日よりはだいぶ楽になったよ。まだ痛みは引いていないけど、これくらいならそこまで支障は無いと思う…だからね、私も一緒に行かないかな」

青空が右腕をさすりながら言う。多少は驚きはしたものの、どこかで彼女がそう言うような気はしていた。彼女が同行すること自体には何も差し支えは無かったが、ギプスの下から覗く痣は未だ引いていない上に指先もなんだか腫れているようで、医療や看護の道に明るい訳ではないけれどこんな様子ではまだ安静にしていた方が良いように思えた。

「それは別に構わないけれど、本当に大丈夫なの？ あれから一晩経っただけなんだから、あまり無理をしない方がいいよ」

口ではそう言ってみても本心ではまだどうすればいいのか決めかねていた。彼女の願いを叶えたいけれど、こんな状態で連れ回してしまつては怪我の治りに良くないのではないか。揺らめく思考の水面の上に、結花のことや冷蔵庫に入れたビーフシチューのことなど、雑然としたことが乱反射するようにちらついては消えていった。

「お願い。なるべく有理奈の邪魔にはならないようにするから、迷惑

をかけないようにするから：私も、あつちに用があるんだ」

胸の底から押し出すように青空はその言葉を放った。その様相が彼女の言った用という言葉の意味を言外に裏打ちしていた。懇願するように見上げるその顔には固く結ばれた意思が秘められていた。

青空が荷造りをしている間に結花に電話をかけた。昨日の申し入れを取り下げの旨と、青空が話せるようになったことを伝える為だった。メールで済ませてもよかったのだが、結花にはどうしてもこの口から出た言葉で伝えなければならなかった。

「有理奈。そろそろ出発するんだね。私の方もちようどこれから向かうとしていた所だったんだよ」

電話口の結花はいつものままだった。昨日のこともあつて少し気負いしていたが、向こうもそれを払拭させようと努めてそうしているのだろう。彼女には忘れてほしいと言われたけれど、どうにもあの言葉が記憶から拭い切れなかった。

「昨日は返信が遅れちゃってごめんね。さつきメールを読んだよ。一ヶ月以上も利き腕が使えないなんて大変だね。私にできることがあつたら何でも言つてね」

「そのことなんだけど、さつき二人で話し合つてね。向こうには青空と二人で行くことになったの。だから、結花には悪いけど今日はもういいんだ」

「そんな。謝らないですよ。元々今週末は何も予定を入れていなかったから、気にしないで。連絡してくれてありがとう。また何かあつたら遠慮無く私を頼つてね」

「ちよつと待つて。それだけじゃなくてね、実はもう一つ、結花に伝えておかないといけないことがあるんだ」

言葉の端々から雰囲気伝わってきたのだろう、結花はきつと口を閉ざして私の言葉を待った。それ自体はほんの少しの間のことだったが、そこで一気に私達の間ぴんと張り切った空気が流れ込んだ。今から口にするのは喜ばしいことであるはずなのにどうしても胃が揺さぶられるような思いが拭えなかった。

「昨日の夜、青空が喋ったんだ。まだ上手く声が出せないようだった

視界の端の窓を一匹の白い蝶が過ぎて行った。結花はあの頃のようによく似ていた。誰にも本当の気持ちを打ち明けられずにこの町の片隅でひとりぼっちでいた、あの頃の私に。

「…私の父が死んだ時。母はひどく泣いていたんだ。だけど、私は泣かなかつた。父とは昔からずつと折り合いが悪かつたからね。あの人との記憶に思い出なんでものはたつたの一つだつて無かつた。だから、私は泣かなかつた。私も母と同じ『家族』だつたはずなのに、私だけが泣けなかつた。明日また母に会うことになるけれど、どうしてあの時泣いていたのかなんてきつと分らないと思う。つまりね、違う世界なんてものはどこにも無いんだよ。どれだけその人と同じ空間で過ごしていたとしても、それだけで心が通じ合うはずなんて無いのだから。私達だつてそう。昨日、青空が出て行ったのはね、私達が『ふつう』の扱いをしていなかったせいなんだ。青空がそう話してくれた。ほんとうの青空は私達の目に映っていた青空とは違つていて、私達の気持ちもまた私達が思っていたものとは違う受け取られ方をしていた。結局の所、私達は同じ世界にいたはずなのに、同じものが見えていなかったんだ」

日の当たらないベランダに出るとそこは穏やかな町の喧騒で溢れ返つていた。この時間帯では眼下の道を歩いていく人の姿はまばらで、紺や橙色の屋根の波間に隠れた国道では両手で数えられるくらいの車がゆっくりと行き交つていた。この町のどこか、小さな片隅で私達は生きていく。

「けれど、私の家族とは一つだけ違う所がある。私達は同じものを見ようとしている。時にはそのせいでたくさんの傷を負ったり、過ちを犯したりすることもあるけれど、それでも私達は同じものを見ようとしている。できるかどうかじゃなくて、そうしようとするこそそのものが一番大切だつたんだ。だから、私達は分かり合えるはずだよ。今日や明日じゃなくても、そう遠くない内に」

「…きつといつか、そんな日が来るのかな」

「ねえ有理奈。ちよつと来てくれない？ 棚の奥に取り出せない物があつて」

廊下の奥から私を呼ぶ声が聞こえて振り返ると青空が自室から顔だけを覗かせていた。その声はきつと彼女にも届いていたのだろう、見えるはずの無い結花の表情が崩れたような気がした。

「分かった、すぐに向かうよ。ごめんね。青空に呼ばれたからもう切るよ。それとね。きつと来るよ。いつか、必ず。またね」

住宅街を抜けてきた涼やかな風が髪を撫でていく。『またね』と返す結花の声は先程よりも柔らかかった。鍵をかけようともう一度窓の方へ向き直ると、向かいの生垣の辺りを十二枚の真つ白な翅が飛び回っていた。

白線の内側で二枚の乗車切符を手に発車時刻を待つ。電光掲示板に目をやると時刻はもうじき午後の一時にさしかかろうとしていた。いくら今が昼食時であるとはいってもさすがに前とは違ってホームには私達以外の人の姿もちらほらと見えた。

『わがままを言ってごめんね。こんな時でもないときつと行ける気がしなくて。』

『別にいいよ。こんな長い道のり、話し相手がいないと退屈で仕方が無いもの』

ホームに立っている間は互いにごく短いメールのやり取りで会話をしていた。携帯電話を触っているどこにでもいるような二人、あるいは一人と一人。私達はきつとそこにいた人々の目にはそう映っているのだろう。青空が文字を打った画面を見せて、私がそれに応えることだってできた。そのはずだったのに、私達はどちらかが言い出した訳でもなく自ずとそうしていた。

『私が話せるのは充電が続く内だけ。これが切れたら私はもう口も利けなくなる。そうだったらもう私は何もできなくなるよ。』

『それでもいいんだ。言葉で伝わることだけが全てじゃない。言葉にはできない言葉だつてたくさんあるよ。それに、私だつて一人きりは怖いんだ』

携帯電話の充電などおそろく道の半ばにもいかない所で無くなってしまうだろう。別に私はそれでもよかった。彼女が隣に居るだけで胸の奥に居着いた不安が小さくなる気がしたから。彼女がどうし

て同行したのかは未だに訊けないでいたけれど、青空もきつと同じように心持ちだった。

『これが終わったらまた元の生活に戻れるんだよね?』

『戻るよ。私はそう信じたい』

『私も。有理奈と結花と私と、皆にとつて、そうなることを願っているよ。』

雨の匂いがして視線を画面から外すとホームに入ってきた子供連れの母親がこちらをちらりと見た。そして瞬きをするくらいの間だけ青空を視界に据えた後ですぐに興味無さげに視線を離してベンチに座った。ここにいる人のほとんどがそうだった。三角巾を吊り下げた彼女をまるで品定めするみたいに一瞥してから、景色の一部として認識して点字ブロックの内側を行くのだった。

『車が欲しいね。』

列車の到着を知らせるアナウンスが辺りに流れる。それは私達が乗る列車ではなかった。誰も彼もが乗る人ばかりで、この町を訪れる人は誰もいなかった。ホームから人が減った後で横目に隣を除いてみると、青空はまだ居心地の悪そうな顔をしていた。

それから互いに知らない顔をしたまま声の無い会話は続いていた。ただ彼女に視線を向けることさえもこの場所でははばかられた。漠然と感じている言い様の無い後ろめたさが誰へのもものなのか、私には判断できなかった。

道中では車内販売の物を買って少し早い夕食をとった。その頃にはもう日は沈み始めていて、見慣れない形をした地平線が茜色に染まっていた。ここには白色や緑色をした山の稜線なんてものは無く、あるのはでこぼことした人工的な輪郭ばかりだった。そのせいなのか、同じはずの夕日までもが違うものに見えた。

「本当にそれだけでよかったの？私の分も食べなよ」

向かいに座っている青空はぎこちない動作でサンドイッチを頬張りながら首を横に降った。今みたいに時々私が思い出したように喋りだして、青空がそれに対して相槌を打つ。四、五駅前くらいでどちらの携帯電話の電源も切れてからはずっとこの調子だった。それが

終わると窓の外に目を向けて、また何か別の言葉が戸口を叩くのを待つのだった。

「こんなにも、こんなにも遠くまで来たんだね」

電柱と家々の群れの中にドーム状の屋根が見えて眩く。それは小学生低学年くらいの頃に遠足で訪れた場所だった。当時はひどく遠く感じたこの場所も水を一口飲んだ間に視界から消えていた。私達はこんなにも速い乗り物に乗って移動していたらしい。列車が駅を通過していく度にひとり言の間隔は狭まっていた。

太陽がビルの森の中に隠れてわずかに暗がりが増えてきた。まるで不来るな鏡のように自分の顔がぼんやりと車窓に浮かぶ。その後ろに映る人々の中に景色を眺める姿は無かった。そこから少し瞳を動かすと青空と目が合った。青空も私と同じ目をしていた。

『だ』

青空が口を縦に開く。彼女はそのままゆっくりと口を動かして『い』『じょ』『う』『ぶ』と続ける。それから更に何かを言おうとした所で夕日がそれをかき消した。ズボンのポケットに手を入れて切符を確かめる。次の駅に到着するのはあと少し先のことだった。

駅舎を出るともうすっかり夜になっていた。人混みの中を力無く抜けていく風は蒸し暑さを覚えるくらいに生暖かく、あの町の冷たい風を恋しく思わせた。この辺りで暮らしていた頃はあまり寄りつかなかった場所だったからか、あまり生まれ育った町に戻ってきたという実感が湧いてこなかった。

通りは人や車や建物など、色んな物で溢れ返っていた。道を急ぐ人や車は私達のことなど見向きせずに見上げるような建物達の隙間を忙しなく行く。ここは私達の住む町とは何もかもが違った。

「やっと着いた。かれこれ半日程度は電車の中にいたのかな。移動するだけでもかなり疲れたよ」

「ちようどそれくらいになるのかな。さて、と。夕飯も途中で済ませたし、服も洗わなくていいし、後はお風呂に入って寝るだけだね」

「何もやらなくていいっていいのは、なんだか落ち着かないな。こういう時ってどうすればいいのかな」

青空がベッドの横にキャリーケースを置いて三角巾を外す。カーテンを閉めようと彼女が近付いた窓には真つ暗な夜がとそこに散らばった光が敷き詰められていた。行きとは違つてよく晴れているのに、そこにあるはずの星達は皆人工の光にかき消されていた。この町では見えるものさえも違うようだった。

「そうだ。親に連絡をしておかないと。まだここに泊まることを知らせていなかった」

ベッドの上に腰を下ろして鞆を漁る。本来ならばここから更にバスに乗る段取りだったが、私達はそうせずそのまま近くのホテルへと向かった。今夜はここで泊まって、明日の朝ここから葬儀場まで向かうつもりだった。

それを最初に言い出したのは私だった。今の家の状況を考えるに、まさか青空をあの家泊まらせる訳にはいくまいと考えてのことだったが、それだけではなかった。父の死という事態に相對して自分だけが感じているものが違つていたのだ。その程度に差こそあつても、明日私が向かう場所で顔を合わせるのはほとんどが父を偲んで集まつた人達だ。母は特にそうだろう。しかし、私はそうなれなかった。あの場所は、あの家は、私がいていい所ではないように感じていた。

「ねえ。一つだけ、いいかな？」

「ああ、心配しないで。もちろん青空の名前は出さないから」

「違ふの。そうじゃなくてね…その、有理奈はさ、自分のお母さんのことをどう思っているの？」

電源ボタンから指を離して携帯電話を閉じる。振り返ると青空は仰向けになつてどこにも無い一点を見つめていた。その後ろの遙か遠くでは電車のヘッドライトが慌ただしそうに橋の上を渡つていた。青空と同じように顔を上げてみても、私の目にはフロアライトに照らされた橙色の天井しか映っていなかった。

「ごめんなさい。今のは忘れて。私はただ、知りたかつたんだ。母親という存在が日に日に自分の中から抜け出ていくようで、それが私には恐ろしくて」

「…自分があの人のことを良く思っただけだ」ということは理解しているけれど、それ以上はよく分からない。負い目があるのか、憎んでいるのか、恐れているのか。だけど、次に会おうとすればその時は父の一周忌かな。その次は二周忌。きつとそうなるよ」

「そう、なんだ。どうしてなんだろかね。それを聞いた後でもまだ、私には有理奈のことが羨ましく思ってしまうんだ」

青空の手が視界の片隅で伸びていき、その動きに従って一輪の黒い花が天井に咲いた。それは風の無いこの部屋の中で微かに身を震わせていた。この花もきつと彼女には見えてはいるのだらう。彼女の声は飾り気の無いように装って柄の無い虚空を空回りしていった。

「いけないことだとは分かっているのだけれど、今でもたまたまに考えってしまうんだ。私と有理奈の人生が交換できたなら、どれだけよかつたことだろう、って。無駄なことなのに。馬鹿みたいだよね」

青空の母親は遠い昔に出ていってもういない。片や私は、母親はいるけれど決して会いたくはない。もしも互いの立場が逆だったのなら、と。彼女にそう言わせてしまった全てのものに対して私は恨みを抱くことができなかった。恨みという感情を形作ることができなかった。過ぎ去っていった癒えない傷達が生ぬるいやり切れなさだけを残して喉の奥を引つ掻いた。

「私も、もしもこう生きられたなら、なんて考えることがあるよ。それが無駄なことだと分かっているもね。私だって生きていた父親が欲しい。仮に次があるとするなら、もう一度やり直したいよ。私は、ふつうの家族が欲しかったんだ…こんなこと、ずっと昔に諦めたと思っていた」

携帯電話を離してベッドの上に全身を放る。私は父と母の間に生まれた。それだけだ。それ以外に何も無かったから、私と私の両親は『家族』にはなれなかった。まるであの山脈に戴かれた雪のように、これから先もずっと変わること無しと分かるくらい決定的に。単に血が繋がっているとか戸籍上そうであるとか、そうだったものではない何かは足りなかったのだ。

「それでも、やっぱり夢見るんだ。あったのかもしれない景色を。も

う少しあの人の言葉に耳を傾けていたのなら、もし私があの家を出ていかなかったのなら。もつと父と話していたのなら、少しくらいは泣いてあげられたのかな。もしかしたら、皆が言うようにあの人はいい人で、本当は自分の親が死んだっていうのに涙の一つも流せなかった私の方がひどい人間だったのかもしれない。父や誰かのせいではなくて、全て私の歩み寄りが足りなかったからなのかもね。都合の良い考えかもしれないけど、私がそうなるように努力してさえいれば家族になれたのかな。なんて」

「確かに、そうなったのかもしれない。だけど、そうはならなかった。お母さんが帰ってくるなんて無いだろうし、有理奈のお父さんはもういない。どうしたって変わることは無いんだ。ほんのわずかな間だけ痛みを誤魔化せたとしても、その後には『今』と虚しさが残るだけ。分かつてはいるのだけれど、ありもしないものと現実を見比べてばかりいると、辛くなってしまふよ」

かすれた彼女の声が胸の鼓動と重なる。もしもここにいるのがあの頃の私達であつたら、きつと私も彼女と同じようにそれぞれの境遇を嘆いていたのだろうか。彼女の痛みに寄り添おうともせずに、ただ同じ生傷を舐め合っていたのだろうか。私もそう思っていたから。

「そう、過去を変えることはできないよ…だけどね、青空。私はこうも思うんだ。もしも人生に『もしも』があつて、そちら側の自分に会えたとしても、私は私にしかねないんだ、つて。例えどんなに小さなことだとしても、何かが一つでも違っていたらきつと今の自分にはなれなかったんだ、つて。今の私達にしか、いや、不揃いな私達だからこそ得られたものがきつとあると思うんだ。だから、どちらの人生の方が良いとかじゃなくて、私はこの人生でよかつたと思ってるよ」
視界から彼女の影が消えていく。その外で温かい何かが空気を含んだ音を連れながら右の掌に触れた。悲しみを溶かし込んだ花びらはすべて散っていた。青空も私も、もう上を向いてはいなかった。青空はか細い笑みを浮かべた後で『そうだね』と呟いた。

「私も、そう思うことにするよ。お母さんが出ていってから、父さんは変わってしまった。そんな父さんの苦勞を少しでも減らしたくて、そ

して何よりも自分自身を騙したくて、私は『藤崎青空』の仮面を作りあげた。だけど次第に私ではない私に耐えられなくなって、最後には自分もろともそれを壊そうとしてしまった。私は私なりに頑張っただけであつたつもりだったけれど、そのせいで父さんとの距離は余計に遠くなつた。その件で学校に居づらくなつた私はこの場所に転校して、ここで有理奈が声をかけてくれたんだ。しだいに有理奈が私の部屋に来てくれるようになって、色んな話をし、お互いにとつてのたつた一人の理解者になつた。そして中学三年生の夏の始め、初めて誰かにお腹の傷のことを話した。それから一度は離れてしまつたけれど、今はこうして同じものを見ている。ひとりぼっちの私達だつたからこそ、こうして出会うことができたんだ。だから、これでよかつたのかもしれない」

青空の腕がフロアライトに伸びて室内を照らしていた明かりが消えた。瞳の裏には彼女の見た表情がまだ残響のように焼き付いていた。絡み合わせた指の間を歩き交うそれぞれの体温がゆつくりと溶け出していき、やがて一つのものになつていく。重なつた掌の上から彼女の体が強ばつているのが伝わってきた。

「ううん、やっぱり違う。私はこの人生で…有理奈に出会えて、本当によかつたよ」

暖かい吐息が鼻先を撫でる。暗闇に消えかけた彼女の瞳に映る自分と目が合った気がした。唇の先で青空の名前を口にする。声の無い部屋の中で、二人の乱れた鼓動と衣擦れの音が満ちていた。

部屋の中に静けさが戻つたのは町がまどろみの中に沈み始めた頃だった。町の息遣いはかなり前から聴こえてこなくなつた。カーテンの隙間から漏れていた作り物の明かりは時間の経過と並んで弱くなつていく。窓を閉めたままの室内には汗が浮かんでくるような暑気が満ちていた。

「私ね、今のが初めてじゃないんだ」

青空はぼつりと言葉を闇に浮かべた。その言葉はなんだか他人事めいていて、後ろめたさ、申し訳無さ、後悔、悲しみ、色々なものが混ざり合っていた。肌色をした彼女の輪郭が私の方に向き直る。わ

た。

通りを逸れて閑静な住宅街を抜けていく。道を行けば行く程に人通りは減っていった。傾き始めた日光が電信柱の影を伸ばしていく。ブロック塀を渡る淡い色をした蝶は太陽と並んで飛びながら、やがて何かを取りに帰るように翻つてどこかへと向かつていった。

「明日からはまたいつも通りの生活になるけれど、これといって何かが変わった訳ではなかったよ。父への思いも母との関係も。すべてがこれまで通りだった。家を出たあの頃と同じままだったよ。今日も明日も、その明日も、少しずつ変わっていく『いつもの生活』がずっと続いていくんだな、って」

思ったことや感じたこと、そのどちらにもならなかったことを歩きながらたくさん口にした。この散歩に行く先など無かった。私も青空も、ただ何かを探し当てるように足を動かしているだけだった。そうしていると、いつしか私達はあの電話ボックスの前で立ち止まっていた。

「今でも、たまに想像するんだ。私が無くした家の鍵の行方について。あれだけ探し回っても見つからなかったあの鍵は今どこにあるのだろうか。きっと清掃業者の人にも拾われたのだろうか」

「あれはね、私が持っているんだ。今もこのケースの中に入っているよ。あの夜の後、有理奈の服を干している時にズボンのポケットの中から見つけて、それからずっと返せずにいたんだ。あの鍵だけがあの約束があったことを証明できる気がして。今まで隠していてごめんね。もう、有理奈に返すよ」

青空はケースを地面に置いて中身を開いた。そして小さな巾着袋を取り出して不慣れな手付きで探しだした。まるであの夜のように周囲には誰もいなくなっていた。伸びた影と広がった影と、同じ方角を向いた二人分の影法師を見つめる。その先はきつとあの頃よりも遠くまで届いていた。

「…父さんと会ってきたよ。最後に会ってからまだ半年しか経っていないのにずいぶんと細くなっているね。なんだかかわいそうだった」
「そう。青空はきちんと向き合うことができたんだね。『家族』という

く。彼女の顔には純真な笑みが浮かんでいた。春の曙光に晒された雪のような脆さを抱えながら、けれどもその下に芽吹いた萌芽のようにしっかりと根を張って。

『家族』のかたち違ってさ、一つだけじゃないんだよ。きつと。だから、ありもしないあるべき姿を決める必要なんて無かった。他の誰かに認められたりするんじゃないやなくて、自分達が家族だと認め合うことが、それが一番大切だったんだ」

差し出された手にはもういらなくなったあの家の鍵が握られていた。夏の訪れを感じさせるような硬い日差しが地面の上を焦がしていく。鍵は時と共に古ぼけて錆を浮かべながら、光を受けて眩いくらいに輝いた。

「そろそろ、帰ろうか」

「うん。帰ろう」

最後に左手を宙に垂らしたままひらひらと揺らして踵を返す。あの町に帰ればすぐに一日が終わり、そしてまた新たに一日が始まるだろう。同じものなど一つとして無い一日が。ポケットの底に落とされた鍵が入れたままだった硬貨と触れてくぐもった軽い音を立てる。その音は柔らかな感傷を伴って掌の内に解けていった。

西の空に夕焼けの色が薄く滲み始める。その背では一つになった二つの影が太陽の昇る方へとまっすぐに続いていた。

帰り道の途中で寄り道をして電子ピアノを買った。スタンドの無い型落ちのキーボードで、売れ残って値引きされていた物だった。本当は弦の張ったきちんとしたピアノの方がよかったが、そう簡単に買える物ではないし、置き場所や騒音のことを考えるとこちらの方が優れていたのだ。

「本当によかったの？他に何もつと良い物があつたのに」

青空の声帯が揺れているのが背中越しに伝わってくる。机の上から伸びたキーボードのコードは青空を避けてカーペットに横たわっていた。もう少しすると明日が今日になる。そんな取り留めの無い感慨が微かなビーフシチューの香りと共に室内に漂っていた。

「これでいいんだ。またピアノが弾けるなら。そうだ。右手がまた動

かせるようになったら、青空も弾いてみようよ。楽譜の読み方は私が教えるからさ」

「私はいいよ。そういう複雑なのは向いていないから。それに、私は有理奈が弾くピアノを聴いている方が好きかな」

「そう言われると、なんだか恥ずかしいな」

接続端子に繋いだイヤホンの片側を右耳に付ける。視界の端の彼女はもう一つを自身の左耳に押し込めた。テンポをリードするつまみや音色を変えるボタンなどには触れなかった。私はただもう一度、あの頃のように自由に演奏してみたかったのだ。

「……こうしていると昔を思い出すね。放課後はずっとあの音楽室で練習していた」

西日の差し込む夕焼け色の世界を瞳の裏にうつすらと浮かべる。誰もいない部屋の中で青空と私、二人だけが背を向けあって座っているあの空間を。そしてそこでピアノを弾いている自分の姿を。全ては、かつてそこにあった光景だ。

「最後にピアノに触れてから数年は経ったから、ちゃんと指が動くかな」

「きつと弾けるよ。それに、仮に間違えたって気にすることはないよ。この部屋にいるのは私と有理奈だけなんだから」

「そうだね……うん。もしも間違えたら、その時はまた、やり直すよ」

あの頃のことを思い出すように中央の鍵盤を一つ押す。プラスチックで作られたそれは私が想像していたよりもずっと軽く、底まで沈んだ白鍵がフレームに当たってかちりと音を立てた。やはり木製の鍵盤とは、夢で触れた鍵盤とは少し勝手が違うようだった。

「ちゃんと聴こえているかな？音が大きかったら言ってみてね」

「大丈夫。綺麗な音だね」

その指でモノトーンの平らな階段を上っていく。右耳から聞こえてくる無機質な音は人工的でありながら、どこか温かみを持っているように感じた。新しいピアノは慣れ親しんだものとはかなり異なっているけれど、この両手に馴染むのにはそれほど時間はかからなかった。

ここには防音加工の壁なんて物は無いし、目の前にあるそれだって
グランドピアノと比べたら遥かに安上がりな物だ。それでも、今は預
けられたこの背中で彼女の鼓動を感じている。夢の中で見た景色と
は遠くかけ離れているけれど、足りないものはもう何も無かった。

「よし。慣らしはもうこれくらいでいいかな」

「何を弾くの？」

最初に何を弾くのかはこのキーボードを買った時に、あるいはそれ
よりもずっと前から決まっていた。『子供の情景』。このメロディを
捧げよう。青空に、結花に、母に、もうどこにもいない父に、そして
何よりも過去と今の私自身に。

「今の私のすべてを」

両手を軽く引いて初めの音に合わせる。今度はきつと手を止めは
しない。昨日までのために。そして明日からのために。小さく息を
吸ってから、私は人差し指にそつと力を込めた。

『この世界は誰しにも苦しみを与える。』そう言った誰かがいた。

その人はそれからこう続けた。『そして、その中から強くなる者も
いる』と。

「ねえ、青空」

「何？」

いつか、この日々を懐かしむことができるようになった時、私達は
強くなれているだろうか。その答えが出るのはまだ、今日ではない。
たくさんの今日が昨日になればきつと、それが分かる日が来るのだら
う。時間とそれ以上にたくさんのもの達が、いつかこの問いかけの結
末を教えてくれるはずだ。

けれど、今の私は思うのだ。例え強くなれなかったとしても、
それは決して悪いことではないのだと。弱いままだからこそ気付け
るものがあり、分かることがあるのだと。見えない傷の痛みのように。
触れ合った心の温もりのように。

「……おかえりなさい」

イヤホンを外して顔を上げる。私からは見えなくとも、きつと青空
もそうしていた。それぞれの視線の先にある物は違っている、私達

には同じ情景が見えていた。決して何にも遮られることの無い、小さな光の河の流れる空が。
「ただいま。有理奈」